

—語り継ごう

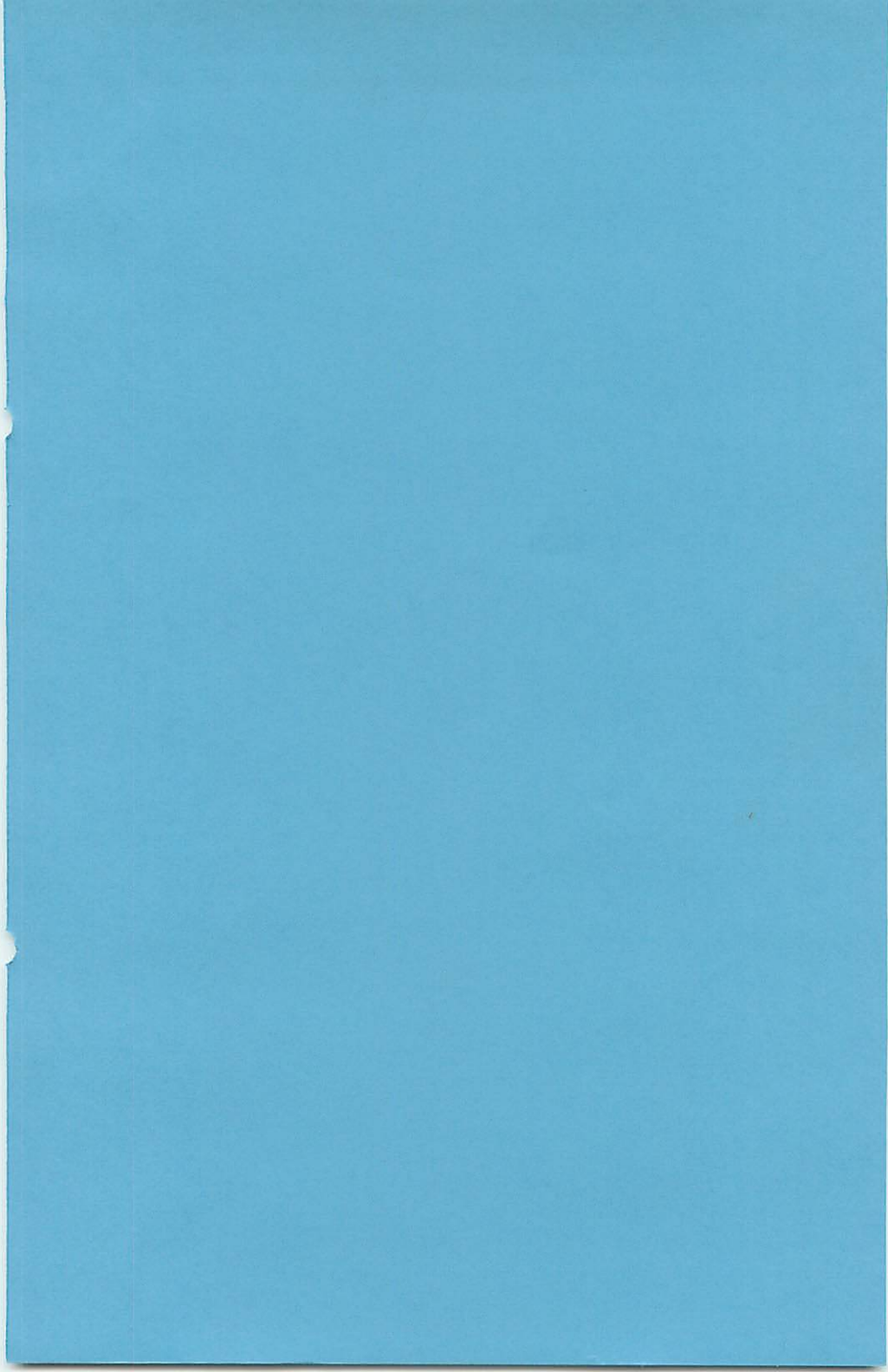
あの日のこと・あの人のこと—

私の戦争体験記

(第4集)



ふじさわ・九条の会



第4集、発刊にあたって

「私の戦争体験記」第4集を発刊することが出来ました。

今回は、十七名の方々にご執筆頂きました。作品の内訳は、空襲の記録4、シベリヤ抑留の記録3、満州の記録3、軍隊と戦場の記録2、銃後の生活・戦後の思い出など5、合わせて17作品が掲載されています。それぞれ貴重なお話ばかりで、こうした身近な皆さん方の戦争体験が、記録として残り、語り伝えられることは、日本の平和を守る上で、とても大切なことだと思います。

昨年は、隣の横浜市で、先の戦争を美化する「歴史教科書」が採択され、藤沢市でも「歴史教科書」を支持する教育委員が任命されはじめてきています。改憲派は、こうしたゆがめた「歴史教科書」を使い、改憲の地ならしをしようとしています。市民が綴ったこのような「戦争体験記」は、正に戦争の真実を語り、「歴史教科書」の誤りを正すものになります。

第4集が、多くの皆さんに読まれ、戦争の悲惨さや悲しさ、平和を守る運動の大切さを知る一助になってくれることを願っております。

二〇一〇年 四月

「ふじさわ・九条の会」

目次

表紙 絵手紙

— 小池英子 —

軍隊とはなにか・学徒動員で招集されて

矢口 仁也 1

シベリヤ抑留に想う

白崎 勇次郎 4

戦災の記録・鶴沼で唯一爆撃された我が家

浅野 陽子 7

望郷の月

戸塚 きんじ 9

戦争の思い出・語り継ぐ戦中、戦後

矢田 健爾 12

戦争がもたらした両親の苦難

上浦 節子 15

戦争と撮影所

関根 マサ 17

つづり絵手紙 一田中 素子—



おしよろ様と終戦記念日

堀 泰子 19

私の戦争体験記

井上一恵 21

東京大空襲と兄の戦死

上野 武雄 25

大地の子として生まれて

小林 麻須男 28

元日本兵の父を持ち・わたしの伝えたいこと

柳川 たづ江 31

富山空襲の記憶

大治 朋子 35

香月康男画伯のシベリア・シリーズを観て

佐藤 寿満子 38

北満の地に散った友のこと

市川 セイ 41

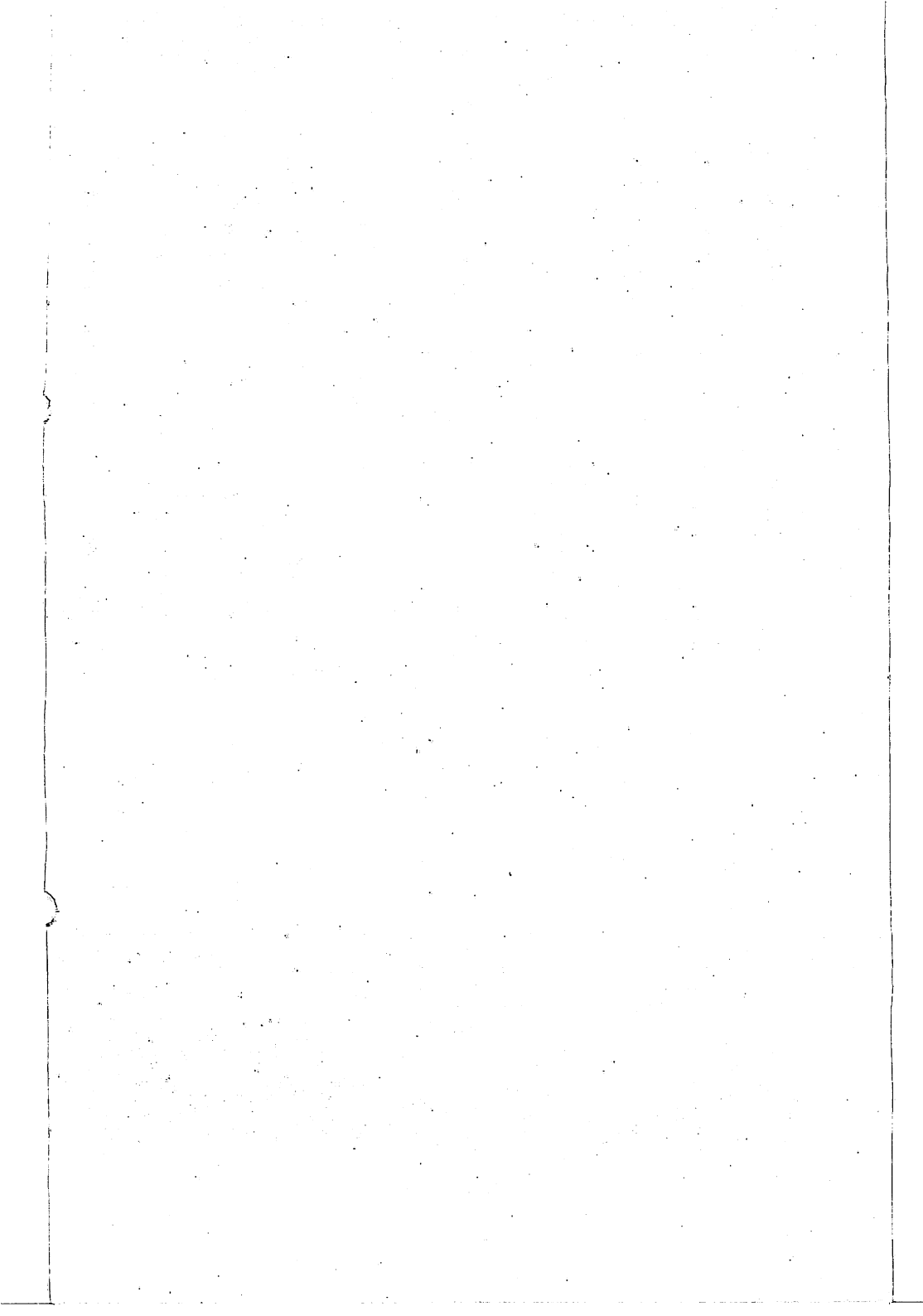
八月十五日に生まれて

上浦 孝彦 44

わたしの大連―第二章

山川 敬子 46





軍隊とは何か

―学徒動員で招集されて―

矢口 仁也

(平塚市 在住)

我が国の旧軍隊は、昭和十八年（一九四三年）敗戦の状況が濃くなってきたため、全ての大学、高等専門学校に学んでいた文科系の学生の学業の道を閉ざして十月に徴兵検査を強行し、文科系学徒を戦線に送り込んだのである。私も十二月二日に広島市の宇品の暁部隊に招集され、七日に宇品港から四隻の貨物船に乗せられて比島（フィリピン）のセブ島に南方要員として送り込まれた。暁部隊は船舶工兵という兵科で敵陣地に対して

兵・資材を上陸させる任務を遂行する兵科であった。私たちは初年兵としてセブ島海岸において徹底的に訓練され、三ヶ月後の四月に、私は、香川県豊浜の船舶予備士官学校に入学を命ぜられた。予備士官学校卒業後、私は任務地の南方に征くこと無くそのまま教官として残され、船舶候補生の教育に当たり、昭和二十年八月十五日の敗戦により、私は生きながらえて故郷に帰還した。この経歴からして、二年余りの軍隊生活においては、直接、敵と対峙しての壮烈な戦いが無かったので、それを述べることはできないが、私の経験した軍隊生活の実態を記して戦前の日本の軍隊の組織・性格がいかなるものだったのかを明らかにしたいと思う。

セブ島においては、現地住民から徴発した高床式住居で生活し、厳しい軍隊教育が始まった。住居に入るやいなや同居の上等兵に怖い面魂構えで

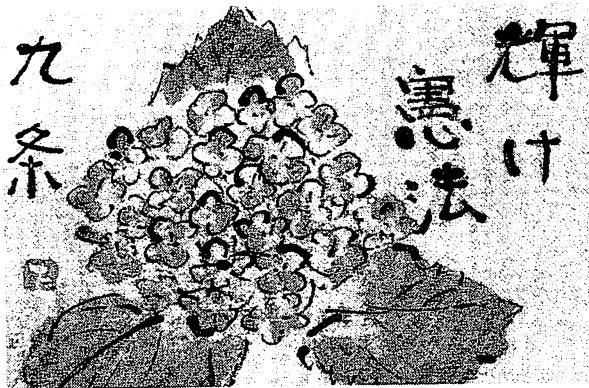
言い渡された第一声は「お前らは娑婆に居た時には偉そうな態度でいたが、ここに入ればもう世界が違うぞ。思うように鍛えてやるから覚悟しておけ」という恫喝だった。この第一声はその場限りの挨拶ではなく、この地を離れるまで、具体的に徹底してやられた教育そのものを表したものであった。軍事教練は勿論厳しいものであったが、それ以上に残酷な教育は内務班において強行されたのである。そこにおいては上官に対しては一言も返す言葉も許されず、一方的に何を言われても従わざるをえなかったのである。その具体的行為は罵倒であり、殴りなどの苛めの暴力であった。肉体的に鼓膜を破られ、顎が割られ、口内の亀裂などという被害の続出、心的には思考力の喪失、うつなどの状況に追い込まれた。暴力の理由は「強い兵隊、軍隊を作るため鍛える」ということであった。この鍛え

によつて、兵隊、下級者は思考力、判断力、抵抗力を失つてしまい、上級者には従順に従うという支配組織が作られていった。兵隊一人ひとりの「いのち」、「価値」という人間性を認めようとする心遣いは全く感じられなかったのである。自分一人の世界は廁の中だけであり、悔し涙でさめざめと泣いたものである。

何故、このような軍隊が生まれたのか。戦争を主目的とする軍隊は、命令従属関係による秩序を確立しなければならないというのが縦系列の差別体制が要求されるからである。戦前、日本の旧軍隊の成立根拠は、大日本帝国憲法と軍人勅諭によつて決まつており、軍隊の統帥権は天皇にあり、議会から独立しており、組織としては上位下達のピラミッド型組織であった。上級者の命令は「朕の命令である」ということが「上御一人の命令」という形で意味の如何を問わず利用され生かされ

てしまったのである。このことが私たち兵隊に
対しては「鍛える」という名の下に強行された
のである。

組織というものは、物ごとを実現してゆくた
めには大切にして重要な構造であるが、同時に全
体と個、多数と少数、勝者と敗者という関係が複
雑、微妙に絡み合っているものですが、軍隊とい
う組織は戦争遂行のため秩序確立という面からこ
の微妙な絡み合いを「国の為、国民を守るため」
という理由によつて軽視、消滅させてしまう危険
性をもっていると言わなければならない。「軍隊
が決して国民の生命財産を守らなかつた」ことは
明白である。私の軍隊生活を通して今でも深く考
えさせられていることは、軍隊は国家にとつて、
私たちにとつて何なのか、必要な存在なのかとい
うことである。



— 矢形 多美子 —

シベリヤ抑留に想う

白崎 勇次郎

(大庭在住)

私は一九四五年八月占守島でソ連軍に武装解除され、十月カムチャツカへ連行され二年間、主として道路建設・木材伐採作業の重労働を、引き続き一年間樺太で農作業・石炭運搬を強制され、三年後の一九四八年暮れ復員した。六十万人にも上る兵士が捕虜としてシベリヤに抑留され、六万人とも言われる人々が現地で亡くなったと言われている。

一体、日本軍捕虜のシベリヤ抑留は、どうしてかくも多く、かくも長期にわたって続いたのだ

ろう。日・ソ政府双方とも受諾したポツダム宣言第9項には、『日本国軍隊が完全に武装解除された後、兵士は速やかに各自の家庭に復帰し、平和的且つ生産的の生活を営むの機会を得らしめらるべし』となっている。第二次世界大戦ではドイツ軍もソ連軍の捕虜となった。ドイツ軍はソ連領の奥深く攻め入り一千万人の人命と四百万の家屋、数千万の家畜を奪った侵略軍だった。そのため抑留中の捕虜への待遇は苛烈を極め二十万人を超える死者を出した。日本軍は一発の弾丸もソ連領土内に撃ち込まなかったから当然日本軍捕虜がドイツ軍捕虜より先に帰還できると思っていた。ところが日本軍捕虜が三年〜五年〜十年と抑留されたのに対しドイツ軍は早々と本国へ引き揚げたのである。

問題は、ポツダム宣言受諾に先だって日本がソ連に対し、国体護持を条件に出した「和平要項」

項」の中に「賠償として一部の労力を提供する
ことに同意する」という条項が含まれていた為
である。この交渉は、米・英・支・ソのポツダ
ム会談が一步先行し陽の目を見ることなく終わ
ったが、大使館を通じてこの文書を手にした狡
猾なスターリンによって、六十万人の捕虜を戦
事賠償とする格好な口実を与える事になってし
まったのである。結果として、北千島を含む関
東軍、北部方面軍兵士は、三年く五年の過度な
強制労働を強いられることになったのである。

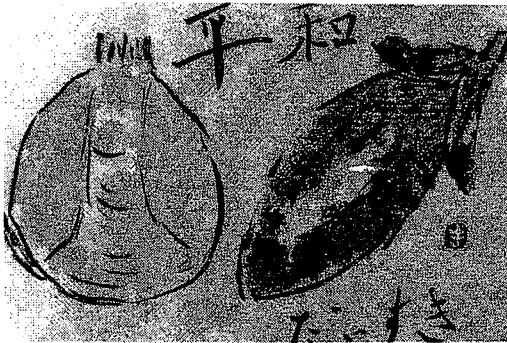
カムチャツカの冬は水分の総てが凍結する。湿
った鼻孔はときどき指で動かさないと氷の壁とな
る。作業日には焚き火当番が薪を集め、みんなが
交代で暖を取るための焚き火を絶やさなかった。
お腹の方を暖めているときは背中が氷のように冷
たい。背中を温めれば腹が冷えてくる。体全体を
暖めるには労働で体を動かすしかなかった。万

国捕虜協定によれば零下三十度以下の屋外労働
は禁止されているが、三年間の捕虜期間中屋外
作業中止の日は一度もなかった。一日の労働時
間は八時間の筈だが決められたノルマ（作業
量）をやり遂げないと宿舎へ帰れなかった。食
事も作業隊毎のノルマ達成度に応じての百分・
八十％・六〇％・四〇％の基準で支給される食
料給付だった。捕虜期間中帰国間際の農作業期
間を除いて、ズーッと空腹を抱えての作業が続
いた。建築資材用木材の伐採ノルマは、三人一
組で直径二〇cm以上長さ二mの用材作り百本
だった。ソ連の鋸は日本製よりズーッと大きく
二人で挽く、一人は倒された木の枝払いと見張
り役をする。一組ずつお互いに作業の安全を確
認するため相応の距離を取ったし、木を倒すと
きはお互いに声を掛け合うのだが、それでもと
きには事故が起きた。近くで作業する組が切り

倒す木の下敷きなつて、怪我をしたり即死の状
態に追い込まれた人も出た。捕虜生活はこのよ
うな生活が続いたのである。

日本と同じく大量の捕虜を出したドイツでは、
捕虜送還交渉に望んだドイツ首相アデナウワーが、
「侵略の責任はヒトラーにあり、兵士に責任はな
い、国際的に認められた協定ど通りに兵士を直ち
に解放せよ」とねばり強い交渉で抑留兵士の早期
帰還を実現した。それに比べ日本の天皇制政府は
ポツダム宣言受諾に際し、『天皇ノ国家統治ノ権
限ヲ包含シ居ラザルコトノ了解ノ下ニ受諾ス』と、
天皇制を守ることに汲々とし国民に降りかかる苦
難を一顧だにしなかった。国の指導者の素質が違
うと国民の運命に雲泥の差が出ることを国民は銘
記すべきだろう。それにしても『天皇のために命
を捧げ』戦塵に散つた多くの兵士達に対する責任
は絞首台に消えた戦犯だけではないだろうに、

せめて『国の交戦権は認めない』と、世界に誓
つた日本国憲法九条は永久に変えさせてはなら
ないと思う。



―柿崎 菊江―

「戦災の記録」

― 鵠沼で唯一爆撃された我が家 ―

浅野 陽子

(鵠沼 在住)

「もどきなさい！」母の絶叫で、家から裸足で防空壕に向かって走り出した私は踵を返してもどり、母と弟二人で押入れに逃れた。米軍機が家の真上を旋回し、邸内の椎の木林に爆弾を落とすのだ。幸いなことに防空壕に非難した三人の兄や使用人は全員無事だった。父は玄関の片隅にしゃがみこんで難を逃れた。頭のすぐ上の壁には爆弾の破片が突き刺さっていた。どれくらいの間がたったのだろうか。爆音がおさまり、そっと押入

れの襖をあけると八畳間の部屋ははがれた壁土が上から下へ、下から上へともうもうと湧き上がるように舞っていた。畳には不発弾がめりこんでいた。四歳の私にはこの記憶のみが脳裏に焼きついる。

首や羽がとんだ鶏が三十羽ぐらい飛び散り、椎の木にぶら下がっていたこと、爆風で二つあった玄関のひとつがなくなっていたことなど、後年兄たちの話で知った。鵠沼で唯一爆弾を落とされた家といわれて育った。相模湾に浮かぶ航空母艦から飛び立って平塚の市街地を空襲した米軍機が、残った爆弾を置き土産に落としていったといわれている。幸い奇跡的に人間に被害はでなかった。

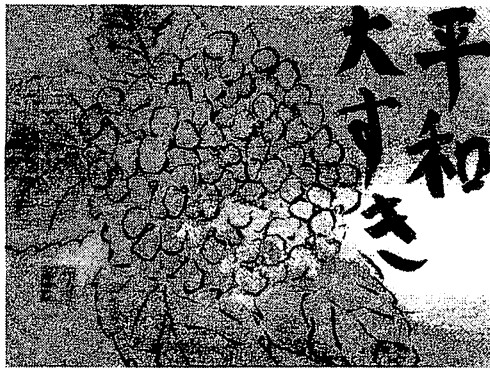
戦争に反対し投獄され、拷問までうけ、それがもとで頑健だった父(葉山又三郎)の身体は蝕まれてしまった。戦後の小作人解放前に、小作人の

の方々に土地を無償で提供した父。その父は私が四年生の秋、(昭和二十五年十月)、台風で流れ着いた流木を集め、その流木を使って校舎を建てた建設業者を糾弾する演説を終えた直後、市議会壇上で倒れ、そのまま四十二歳の若さで帰らぬ人となった。死を信じられぬ私は、毎夕家の前の砂利道にしゃがんで帰らぬ父を待った。母も六年後東大病院で脊髄腫瘍の手術後帰らぬ人となった。五人の兄弟が残された。私が高校一年の秋だった。

今日も厚木基地から横須賀にむかつて米軍の最新鋭機スーパーホーネットが大爆音を立てて飛ぶ。電話もテレビの音も聴こえない。会話も途切れる。

私が「ふじさわ・九条の会」に入会し、ささやかですが活動するのは、平和運動に身をささげた

両親の遺志とともに、日本の国からひとつも基地がなくなること念じているからです。



―吹腰 政子―

望郷の月

戸塚 きんじ

(辻堂太平台 在住)

昭和二十年の冬、私はシベリア「チタ市」の俘虜収容所に居た。チタ市は中国の満州里から入ったところにあるモンゴル寄りの町で、政治犯流刑の地として知られている。

折しも厳寒期、さだかではないが警戒兵の話によれば零下五十度超のときもあるとか。何もかも凍る戦慄すべき寒さであった。

そんなある日、作業から帰った我われは、水汲みの使役にかり出され数キロ離れた湖まで行くこととなった。櫓にのせた樽を数人で引っぱり、水を割って樽に水を汲むのである。空腹と疲労でふ

らつく足を踏みしめながら雪原を行くと、酷寒の中でも気味悪い汗が背中を流れる。そんなとき喉の渇きに堪えかねて、落ちていた氷をひよいと口にふくむと、あつと言う間に舌にはりつき、慌ててとり出そうとすれば既に遅く、舌の皮がはがれ血が流れるのであった。氷は正にドライアイスと化していたのである。

やつとの思いで樽に水を汲み上げほっと一息ついて天を仰いだその時、私は見た。いつの間にか中天にかかつて啾々と輝いている月があったのだ。明るく美しく神々しい月は、湖上で蠢いている。哀れな俘虜の姿を余すところなく照し出している。そうだ、この月は海を隔てた故国日本、父母の国日本を照しているのだ。そう思った瞬間、押さえきれない望郷の念がふつふつと湧いて来た。

この日以来、抑留中私は機会さえあれば月を仰ぐこととした。

ぐこととした。

そしてシベリアの月で絶対忘れることの出来ない
もう一つの場面がある。

この頃ロシアはシベリア開発のため、六十万の
日本兵を送りこんだものの、これを受入れる能力
がなく、食糧や設備等すべてに不備、特に食糧の
不足は甚だしかった。もつともこれは日本兵のみ
でなく現地の民間人もほぼ同様だったと推察され
た。

当然の結果として栄養失調に罹り、これに起因
する疾病による死者が発生した。我われの收容所
も例外ではなく、その数は逐次増加していった。

硬直した屍は收容所の廊下のはずれにさながら
物体のように積み重ねられ、数体がまとまると櫛
に積んで埋葬のため運び出された。

しかしこの遺体は墓地に葬られるのではない。
ただ芥のようにシベリアの辺地に埋められるのだ。

我われは警戒兵の指示により、とある荒寥と

した大地の一角を鉄棒をふるって穴を掘った。

しかし栄養失調気味の瘦せた腕がいくら鉄棒を
振りおろしても凍土はコンクリートのようで受
付けない。地表を焚火で溶かし、やっと凹みを
作るとその上に屍を横たえ、少量の土と多めの
雪をふりかけて終るのである。

春が来て雪が溶ければシベリア鴉の餌食になる
だろう。墓標はおろか目印一つない。勿論遺骨も
遺品もない。彼等の魂魄は五千キロ余を超えて故
郷に帰れるのだろうか。そして、これは自分自身
の明日の運命であるかもしれないのだ。

「俺は死なんぞ、日本の土を踏むまでは」固
く心に誓った。日没は早い。收容所に着く頃、あ
の月がまた我われを照した。

月よ、彼等の無念さを故郷の肉親に伝えてくれ、
私は天を仰いで祈った。

思い返せば月はいつもただ静かに我われを包み見守ってくれていた。そして魔術師のように辺りの景色を美しいものに変えてしまうのだ。

まがまがしい有刺鉄線の収容所さえ味のある点景と化していた。

この月によつて癒され、故国とつながっていたと思う。その美しい故国日本は海に隔てられた遠い島国であるが、それ故に自然に守られ、民族や宗教の争いのない平和がある。

軍隊、戦争、抑留、この特殊で苛酷な経験は、平和とか自由の対極にあるものであり、さればこそ、真の平和、真の自由の何たるかを、身に沁みて体得出来たと思う。今、私は生き長らえて平和な生活を送り、俳句を楽しんでいる。有難いことである。

しかし、私は、今日までシベリアの体験は、つとめて「言うまじく」「聞くまじく」を心掛けて

来た。自分の心の奥底には、万斛の怨を飲んで異国に散った友の誰彼のこと沈澱し、何となくうしろめたい気があり、そのことが私の口を重くしていた。半世紀余を経た現在、かつての紅顔の青年は厚顔の老年に変わってしまった。時代錯誤のようであるが、一筆シベリアのことに触れておきたい心境になったのは、月という媒体と、年令のしからしむるところであるうか。

盆の月 シベリアの地で 見しことも

終戦日 我はかく生き 永らえし

逝く前に いくさ語らん 終戦日

きんじ

戦争の思い出

―語り継ぐ戦中・戦後―

矢田 健爾

(鶴沼在住)

私は一九三三年、昭和八年の東京生まれ、太平洋戦争が始まった時は藤沢に引っ越してきて、小学校二年生だった。それから三年生の頃は軍国主義教育が盛んで先生から「びんた」をもらった事がある。私が級長で、皆を整列させておかなかつたと言う理由、だから納得できない上に、大人が思い切り、ひっぱたく、その力は子供には、痛さと言響きが限度を超えた。藤沢本町小学校である。當時は第四国民学校とっていた。どこの学校にも奉安殿があり、教育勅語なるものを収めてあり、

学校の儀式の度に、校長が白い手袋で恭しく取り出し、朕思うに、我皇祖こうそうとのたまわつた。子供は下を向いていなければならぬ。歴史教育といえば天皇の系図を暗記するぐらいのものだった。四年生になったら、郊外から材木を担いで来た。学校用の薪運びである。五年生になると、いよいよ食料が無くなり、母親が着物を持って善行の農家に買い出しに行つても、今日はこれだけだったと言つて一籠の茹でた小粒のジャガイモがその晩の夕食だった。子供五人の家族で、足りる筈も無い。その内、母が「情け無い」と言つて泣きじやくつた事を、昨日のように良く覚えている。父は「外に食べに行こう」と言つて子供を連れ出したが玉半には、うどんを粒にしたような、ご飯しか食べられなかつたが、当然のどを越さなかつた。学校では“欲しがりません、勝つまでは”と教えられて

“欲しがりません、勝つまでは”と教えられていた。いよいよ戦争が激しくなり防空壕に飛び込んだ。どこの家でも穴を掘っていた。敵機襲来と言うサイレンで学校も早引けだったが、途中、一本松の大ガードの所まで来た時、頭上に江ノ島を目印にグラマン戦闘機が低空飛行で飛んで来た。走る子供めがけて兎でも撃つように機関銃の掃射、機上の兵隊が見えた。急いで途中のトンネルに駆け込んだ。線路に跳ね返る弾の音が鋭く響いた。後で聞くと神戸君という友人がこの時撃たれて一生杖を突いて歩かねばならなかった。横浜空襲の時では無かったかと思うが、夜空にB29がサーチライトに照らし出されて、細長い胴体と四機ずつあるエンジンがはつきり判った。高射砲も届かない下の方で花火のような白い煙が上がったが、命中することは無かった。

そんな、ある日、父親が出先の岡山で被災したと言う。どう云う事かと言えば、親戚の引越し手伝いで、焼夷弾の直撃、火のついたオイルをかぶって全身に大やけど、近くのドブ川に飛び込んで火を消したそうだ。混んだ夜行列車に乗り、大阪經由で見舞いに行った。大阪に差し掛かった時には、空襲で夜空が真っ赤に燃えていた。列車は動かない。やつと病院にたどり着いたが、父は全身包帯だらけでミイラ人間のようだった。治ってからも鼻や耳が解けて皮膚は赤くひどい人相だった。その時、以後、子供たち四人は祖母の居る尾道に預けられて学校も行かずに、毎日兎の草取りだった。食事は鯉節の粉と麦ご飯が何よりご馳走に思えた。広島に新型爆弾が落とされたと言う話が伝わってきた。ラジオの重大放送で終戦になったことを大人から聞いた。それから田舎で衛生が悪かったの

だるう赤痢が流行って隔離病院に入れられた。やとと治って藤沢に連れ戻されたが、親たちは尾道から畳表を取り寄せて売った。下駄や干し柿を仕入れて、商売したりで子供も売りに行かされた。鵠沼の金持ち風の家や、横浜野毛の商店街の路上だ。姉と二人で良く売れた。食うものと言えどもろこしの干した粕、干し杏とかが配給になった。しらみが髪の毛についたと言って頭からD D Tをかけられた。藤沢駅にM Pがいて試しにギブミーチョコと言ったが、吸いかけのタバコを寄越した。ふざけるなど思っ、以来試さなかった。絵描きだった父はP Xで絹こすりと言う肖像画の商売を始めたが、夜中まで描いても、そんなに稼げなかった。中学に入ってからは、帰りに焼き芋を食べに良く行った。アイスクャンデーを食べに松本屋にも行った。絵を描き始めたが木炭が無かったので、消し炭

を使って見たが上手く行かなかった。横浜に絵を描きに行ったが、まだ焼けビルが残っていて、焼けた赤く錆びた鉄骨がむき出しで崩れていた。食い物は箱で作る電気パンしか無かった。後は關米の玄米をビール瓶で竹の棒で交代に突いて、やととご飯にありついた。竹の棒は糠でびかびかだった。戦争中よりはまじだったが、ろくなことは無かった。朕はたらふく食っている、汝臣民飢えて死ねという時代である。戦争を始めた天皇は全国を回り、手を振って歩いた。戦争中はお召し列車を見ただけで目がつぶれると教えられていたのになあ。そつと見たけど、目は未だにつぶれない。教科書が間違えていたと言って墨をぬらされた。子供心にも戦争はこりこりだと思った。

戦争がもたらした

両親の苦難

上浦 節子

(亀井野在住)

私は昭和二十七年に東京の浅草で生まれ、直接戦争を知りません。が、昭和三十年代の東京にはまだ戦争の傷跡が残っていました。

子供の頃、母と行った上野や浅草の繁華街には腕や脚などを失ったり傷を負った傷痍軍人が数人のグループでいて、白装束に身を包み、足許に小箱を置きアコーディオンを弾きながら、道行く人びとに頭を下げ施しを求めています。その光景は悲しく、ちよつと怖く子供心に焼きつき今も心

に残っています。

小学校高学年の頃だったか、母から、母が再婚だという話を聞きました。最初の夫は私の父の長兄にあたり、結婚3ヶ月で入隊し中国や南方の島で戦い、そして亡くなったということです。母は幼い一人息子も病で亡くし、実家に戻ることもできず、婚家を出て一人で生きていくことも難しい状況でした。そのうち戦死した夫の弟である独身の私の父との再婚話が出たそうです。二人ともイヤだと抵抗したようですが、親が決めたことに反対もできずに結婚し、東京に出てきたのでした。

母の話は子供の私にはとても重く悲しく、複雑な気持ちでした。以後その話を両親に聞くことはなく、二人が亡くなってしまった今となっては、もつと詳しく聞いておけばよかったと思つても叶わぬこととなつてしまいました。

今、当時の母・伯父・父の気持ちを思いやると

胸が痛みます。どんなに苦しく辛かったことか。そんな思いをした人びとが日本に、世界にどれほどいたことか。

今も世界では戦争が続き、悲劇はやむことかありません。人間には知恵と理性があり、対話もできます。武力に頼らず外交で問題を解決に導くことができるのではないのでしょうか。時間もかかり、困難を伴うでしょうが、戦争のない世界になつてほしい。



— 中村 道子 —

戦争と撮影所

関根 マサ

(亀井野在任)

戦争が終わるまで私は東京の東宝映画撮影所で電話交換手として働いていました。映画は監督や俳優さんやカメラマンだけでは作れません。音楽や効果の係、メイク係、照明係、衣装係、セットを作る人、大道具、小道具など、実に多くのひとたちが力を合わせないとできません。それぞれが仕事の段取りを決めて、打ち合わせをする、そのほかに本社や外部の商人との連絡なども、その時代は携帯電話などなかったので全部が私たちの交換台を通してつながっていました。交換台はたく

さんの人と接触できて楽しい職場でした。

その頃に活躍していた監督の親分格はやはり山本嘉次郎さんでしょう。エノケンさんはいつも私たち働くものにも磊落でたのしい人でした。原節子さんは私たち女性からみても美しい人でした。黒沢さんや円谷(つぶらや)さんは未だ助監督でした。長谷川一夫の「藤十郎の恋」とか「エノケンのちゃっきり金太」のような映画はいつの間にか姿を消して、「加藤隼戦闘隊長」とか「ハワイ・マレー沖海戦」とか、♪濡れた仔馬のたてがみを：♪の主題歌で知られた高峯秀子さん主演の「馬」などにも総理大臣東条秀樹の推薦文が最初に映し出されました。その時はまったく気が付きませんでしたがいま思うとどの作品も国策に沿った、戦意を高揚させる目的の映画になっていました。「ハワイ・マレー沖海戦」では大きな池をつくりそこに本物とそっくりの模型の軍艦を浮か

べて波をたてたりして撮影し、実際に撮った映像と組み合わせさせて作りました。そう言うやり方を「特撮」と言うらしいですが、戦前の東宝撮影所の特撮技術は優れていたようです。円谷助監督はその第一人者でした。その技術が戦後に「ゴジラ」や「ウルトラマン」の制作に役立ち、円谷さんは有名になりました。テレビのなかった戦前は、映画が政府の政策宣伝の唯一で大きな手段だったのでしよう。



—山崎 正子—

おしよろさまと

終戦記念日

堀 素子

(羽鳥在住)

八月はお盆の月です。

十三日の朝戸口に茄子ときゅうりにおがらで足をつけ馬と牛にみたておがらをたてかけて線香をともします。線香の煙にのってご先祖様もどつてくるとおそわれました。

十五日は終戦記念日です。

母の兄は、中国で地雷をふんで戦死したそうです。お骨の箱の中に爪だけが入って、戻った時はひと

り息子をなくしてしまった家族の悲しみはたえがたく、泣いて泣いてつらい思いをひききずつていたようです。

優等生で体格もよく甲種合格になっちゃって、ちんちくりんで乙ならよかったって祖母はよく言うてました。

兵隊の分まで長生きするんだって……長生きしました。百歳の時も元気でぼけないで珍しいと表彰されたり取材されたりして長生きの秘訣はなんですか？などときかされると好き嫌いなくいただくことですとこたえていたものの、陰では(秘訣なんてありやしない、兵隊の分だ)とむくれていました。

戦争の話聞かされるたびに(反対すればよかったの)と子供心に思っていました。が反対なんていいたら赤だつてしよつ引かれてひどいめにあわされ殺された人もある。そして戦地では虐殺暴行

殺戮なんてひどい事があつたのでしよう

そんな時代に生まれ合せちゃつた多くの人達ごめんなさい、気の毒に思っています。益男おじさんの墓石の白みかげ石は六十三年を経てすこし茶色くなりました。けれど、私の戦争反対のルーツはそこにあります。

祖父母は孫がみな女の子だったので「戦争に取られなくていい」といったけれど、これからの戦争は次元が違つてきました

地球はひとつ、宇宙飛行士も言いました「国境線はみえない」と。それなのにいつの世もどこかで戦争が起きています。(話し合いで解決させるのが政治家だと私は思っています)

姉の最初の記憶は(防空壕へおばあちゃんと逃げていくこと)だそうで、生きる」ということはこういう事を繰り返すことなのかと思つて居たそうです。

平塚が空襲で焼かれた時は、西の空が真っ赤に染まつて恐ろしかったといっていました。同級生には父親が戦死してしまつた子も居ました。

残された家族の悲しみ苦労は計り知れないでしょう。ただ、こどもは皆おなじように山へ炊きつけの燃し木を集めにいき、海へ地引網を引きに行き雑魚をもらい、田んぼへ佃煮にするイナゴをあつめにいったのです。

いま白状すると、イナゴだけはにがてでこわくて田んぼに入れなかつた。ごめんなさい。今なら掘めると思うけれど肝心のイナゴが居なくなりました。トンボも蝶ちよも蛙も蛇もみませんね。

自然に生きる力をもらえなくしてしまつたこれからのこどもたち、すみません、何が大切なことか考へて行動してください。お願いします。

私の戦争体験

井上 一恵

(大鋸 在住)

―戦死公報―

昭和十九年一月、日本橋茅場町での事。B29に備えて、日本中は常に燈火管制が引かれ、とくに下町の夜は真っ暗でした。

久し振りに疎開先から来てくれた母方の祖父に手を引かれ、五歳だった私は銭湯から帰って来ました。寒い北風に背を丸め、家の角を曲がると二軒長屋の一軒であった私の家の戸が開いていて、家の中から光が真っ直ぐに暗い道に伸びていました。

男の人が二人立って居り、母のうつむいた様子に祖父が「勇治さんか？」と私の父の名を叫びました。

戦時中、何処の留守家庭でも、朝、晩、気にかけている遠い戦地に行った人の安否でした。母は深くため息をついて私の頭に手をのせました。父、戦死の知らせでした。

小学一年生になり、葬式も終わり、母は戦争未亡人として立派に対応してきました。でも夜、布団に入ると毎晩、声を殺して泣いていました。困った私は、布団をかぶってじっと寝たふりをしました。本当に切なかつたです。身にしみて戦争が嫌いになりました。

―防空壕のうた―

「ポーと鳴るのは警戒よ

ポーポー鳴るのは空襲よ

空襲警報鳴ったなら

早く入ろう防空壕」

戦争中、子ども達は道路で遊びながら、いつも歌っていました。

昭和十九年、当時私が住んでいた処は、日本橋茅場町の裏長屋で、空襲になっても身をかくす空き地はありませんでした。庭があるのはオダイジンと大家さん位でした。

父の戦死後、私は母と二人で暮らしていました。母は、玄関脇の四畳半の畳を一枚上げて二段の階段を作り、降りると二人座れる位の穴を掘りました。母は働きに出ており、留守中はいつも畳は上げてありました。

ポーと鳴ると、私は桃子ちゃんと名付けた等身大の縫いぐるみと一緒に暗い穴に降りて二人でジ―

と座っていました。

ヒュードカン、爆弾の音を聞くと背筋がすくみます。直撃を受けたら助かりません。でも爆風除けにはなりません。

警戒解除のポーが鳴ると、私は飛び出して見にゆきました。水道管が直撃され、道路に大きな穴があいて、水が勢いよく噴き上げていました。電線に引つかかっているのは魚屋のおじさんの身体の一部だと、ワイワイ、ガヤガヤ見上げたものです。夜の焼夷弾は落下傘につり下げられフワフワと並んで落ちてきました。

三月九日の東京大空襲の夜、大小の火の粉で先が見えない中を、家から二百メートル位の坂本国民学校に逃げ込んで私は助かりましたが、前の家に住んでいたお年寄りには逃げ損なって防空壕の中で灰の下でした。この大空襲で沢山の人が死にました。黒こげで、いろんな形で道はいっぱいでした。

中東やアフガニスタンの子ども達もは、今もこんな生活が続いていると思うと胸が痛みます。

―空襲―

電車の運行中、空襲された時、走っている電車は爆撃のよい目標になります。一度に沢山の人を殺せますから。(九条に守られている今の日本なら

一人殺されても警察やマスコミが大騒ぎするのに)私が、経験したのは、国鉄、京浜東北線の田端と上中里の間を走っている時でした。電車は急停車して、両側のドアが一斉に開き、全ての乗客が線路に急ぎ飛び降りました。線路を横に跨いで、跨いで、一刻も早く車両から離れないと爆弾と機銃掃射を受けます。

そこは広い操車場でした。はるか遠くまで線路が

並んでいました。六歳の私は、祖父について、必死で線路を飛び越えました。上野から続く崖の山すそをたどりつくと、深い側溝がありました。その深みにもぐり、かくれました。どの様に帰ったのか覚えていませんが、今でも電車の線路を見ると、ピョンピョン飛び越えたことを思い出します。

―機銃掃射―

二十年七月、東京を焼け出された小二の私は、埼玉県与野市立第二国民学校に転校しました。毎晩の爆撃で疲れ切った私には、広々とした田園風景は夢のようでした。

そんな田舎なのに、空襲のポーは鳴りました。十時頃です。学校を追い出され、のんびりと畑道を

歩いていたら私に空から飛行機が舞い降りてきました。急降下し、しつかりと私に標準を当てたその顔は、鼻の高い二十才位の青年で、革のマスクをつけていました。家に行くか、学校に戻るか、私は一瞬迷いました。とにかく走ったのです。ダダ・。私は何かにつまづいて倒れ、草むらに引きずり込まれました。母の作った白いブラウスは、ペアと脱がされ、私は農夫のお腹の下に隠されました。飛行機は探して居ましたが、あきらめて去ってゆきました。農家のおじさんとおばさんが隠してくれたのです。どこの方か分かりませんが、お蔭で私は生きて八月十五日を迎えることができました。ありがとう。



— 渡辺 王子 —

東京大空襲と兄の戦死

上野 武雄

(湘南台在住)

一九四五年三月九日、私は、東京高等師範学校（現筑波大）の一年生（19才）でした。当夜は、東京・小石川（文京区）の消防署に動員されました。当時は、消防署員が軍隊に招集されたため、手薄になっていました。

午後十時から望楼勤務に就き、大塚の街を見上げていました。ちょうど十一時三十分頃空襲警報が発令され、「B29の大編隊が日本に向かってきている」とラジオが報じました。まもなく南の空にB29の編隊が現れました。サーチライトに照ら

され、地上から高射砲が討たれます。しかし、その弾は全然届かず、悠々と都心の上空で東へ旋回してゆきました。間もなく東の空が真っ赤になるのが見えました。同時に「東京の江東・浅草方面にB29が焼夷弾爆撃をしている」とラジオが報じました。B29は、次から次とやって来ました。その数200機以上だったと後で知りました。

東京の空が真っ赤に燃えている様子は、三月十日の夜が明けるまで続きました。当時、私は、江東地域の旧制中学校を出ていましたので、江東地域には、友人の家がたくさん在りました。特に親しかった友人の家が両国の国技館の近くに在りました。十日の朝、意を決して、私は、両国まで行くことにしました。もちろん、電車は停まっています。大塚から九段へ出て、九段通りを両国に向かって歩いて行きました。神田から浅草橋のあた

りまでは、ふだんと変わりありませんでした。ところが、両国橋を渡ると様子は一変しました。道の両側に黒こげになった焼死体が並べられ、異様な臭気を放っていました。大人と子どもの区別はつきませんが、男女の性別などは全然分かりません。私は正視することができませんでした。

軍隊が出動し、兵隊が無造作に屍体を整理している様子にも目をそむけるばかりでした。また、わずかに残った鉄骨で、国技館の跡地は分かったのですが、友人の家は確認できませんでした。帰途、両国橋を渡りながら「こんなことで日本は戦争に勝つことができるのか？」という疑問が心の中に沸々と生まれたのを覚えて居ます。

この三月十日の大空襲で私の級友九名が亡くなりました。

そして、六月になって、兄の戦死の公報がきまし

た。フィリッピンのレイテ島にて、三月三日に戦死（享年二十四才）との知らせでした。白木の箱には何も入っていませんでした。

母は、その箱を仏壇に飾り、線香を上げながら、肩をふるわせていました。その母の後ろ姿は、終生忘れることができません。

「俺が働いて家計を助けるから、お前は上の学校へ行け」と言つて、自分から工員になった兄。そんな兄を私は心から慕っていました。その兄の徴兵検査は第二乙種だったので兵役は免れていました。ところが、一九四四年の六月に、ついに赤紙が来て、甲府の連隊に入隊しました。そして、あわただしく、その年の暮れに一枚の葉書が届いたのです。外地に行くを書いてあったが、どこにも書いてはなかった。入隊してわずか半年足らずの訓練で、戦地へ出されて行ったのです。まさに殺されるために戦地へ行かされたのです。こんな

無謀なことを誰がやったのか？

腹立たしく無念でなりません。しかし、当時は、「国のため」という大義名分のために、我慢せざるを得なかったのです。

戦争が終わり、この太平洋戦争が侵略戦争であったことを知った時、私の人生観は一変しました。一九四五年八月十五日、満二十才になっていました。以降、六十四年間、平和を守る、天皇制反対、を腹に据えて生きてきました。



— 神成 幸江 —

大地の子として生まれて

小林 麻須男

(亀井野在住)

私は昭和十六年、満州開拓団の子としてハルピンに近い木欄という場所で生まれました。戦争が終わり、昭和二十一年、私は五歳の時に満州から引き揚げて来ました。そして引き揚げて以降、思えばあつと言う間に六十年近い年月が流れました。平成十五年の夏、亡くなった人々を慰霊しようとして慰霊団が組織されました。私もこの機会を逃したから現地に行く機会も無いだろうと思ひ、慰霊団の一員に加わりました。

訪問したのは八月下旬で、ちょうど終戦の夏と同

じように暑い日でした、現地は、素晴らしい天気、真つ青な空に白い雲が流れ、爽やかな風が頬を横切りました。開拓団のあつた丘の上に立つと、何処までも続く広大な大地の向こうまで緑のトウモロコシ畑が広がっていました。そして、土壁の民家が並び、家々の庭には赤いコスモスや百日草が咲き、子豚や鶏が道に飛び出し、えさをあさつて居ました。正に、満州で生まれた私の原風景が、そこに広がっていたのです。

その時、何故か私の脳裏に、満州にいた当時の幼い日の記憶が突然、浮かんで来たのです。私が、乳母車に乗せられ、コーリヤン畑の脇に置いて行かれたとき、どうして私だけが乳母車にのせられ、皆と一緒に畑に連れて行ってもらえないのかと、疑問に思った時の記憶です。次の詩は、その時の記憶を、一遍の詩に綴ったものです。

「大地の子として生まれて」

母よ、私はどうして、今、一人乳母車に座っているのか

眼前には、コーリヤン畑が広がり

キラキラと、夏の日差しを受け

かすかに葉影が揺れている

母よ、辺りには誰もいない

ただ、私だけがこの大きな木の下で

一人、乳母車に座っている

母よ、一体、私はどこから来たのか

この果てしない北満の地で、

今、なぜ乳母車の中に座っているか

私は、どこから来たのか

なんの記憶もなければ思い出もない

ただ、明るい日差しだけが眼前に広がっている

確かなことは、今、私がここに座っていることだ

けだ

.....

そうか、今、私はこの明るい世界に

一人、飛び出してきたばかりなのだ

何億年もの生命の営みの最先端に

今、私は押し出されて来たばかりなのだ

怖がることは何もない

この偉大な生命の命ずるまま

自らの足で、歩き始めよう

怖がることは何もない

.....

コーリヤン畑の続く光の中で

今、始めて、私は目を醒ました

母よ、私を乳母車から下ろして下さい

生命を得た私が、自らの足で歩き出すために

それが、どんなに遠い人生の道のりであっても

この広いコーリヤン畑の向こうにたどり着くため

に
母よ、私をこの乳母車から下ろして下さい

幸い、私は、生きて満州から引き揚げる事が出来ました。そして、今日まで六十数年の人生をコーリヤン畑の向こうに向かつて歩み続けています。しかし、私と同じように開拓団で生まれた幼児の大部分は、コーリヤン畑の向こうに辿り着くことは出来ませんでした。引き上げの途中亡くなった開拓団員は220名で、内7才以下の幼児は80名、5才以下の幼児で帰還出来たのは、私を含め3名だけでした。殆どが大地の土にうもれてしまったのです。

慰霊団は、現地でこうして亡くなった幼児達を供養しようと、当時建てた石のお地藏様が在る場所を探しましたが、夏草で覆われ、それらしい物は何ひとつ見つけることはできませんでした。慰霊

団はそれらしい場所に水をまき、供物を捧げ、線香を立てて幼児達の霊を慰めました。

消えたお地藏様は、亡くなった幼児達を導く為に、一緒に大地の中に埋もれていつてしまったのでしよう。

やがて、長い満州の夏の日も終わり、一行は現地を後にしましたが、まばゆいばかりに赤い夕日が、何かを語りかけるように大地の向こうに沈んで行くのが見えました。

こうした幼児達の親たちも、今では、高齢でつぎつぎと亡くなり、覚えて居る人も殆ど居りません。しかし、私自身、大地の子として生まれてきたからには、生き証人として、これからも、何も言わず亡くなっていった幼児達の思いを胸に、コーリヤン畑の向こうに向かつて歩き、語り続けなければならぬと思っています。

元日本兵を父に持ち

—私の伝えたいこと—

柳川 たづ江

(善行在住)

父の手記より

—沖繩戦・屍とともに—

中国から一九四四年(昭和十九年)八月十九日に対馬丸で沖繩に上陸した。対馬丸から見た沖繩は、まるで竜宮城のような綺麗な島だった。「こんなに綺麗な島に、一体なんの用で来たのか」と思った。竜宮城のような沖繩は、その後地獄の戦場になった。

私たちの部隊は、沖繩戦の一番の激戦地、嘉数で戦った。

肉弾戦法で弾薬を持って戦車に体当たりした兵士は、ちようど、卵を床に叩きつけたようになり、骨が一本も残らず、肉片もない状態であった。道に横たわる数知れぬ兵士の頭は飛び上がり、足は切れ、両眼は飛び出し、全身やけただれていた。

後退して、私は右腕と右足を負傷した。並んで戦っていた者は、無数の肉片となり散り散りとなり横のソテツの葉に服の切れ端とともにかかっていた。他の者の姿も飛び散ったのか、どこにも見あたらない。私一人だけが助かってしまった。自分より若い命が先に失われたことが悔やまれた。負傷後は、陸軍病院を求め、一人で戦場をさまよった。

そこで見た戦場の悲惨さは、どんな光景だった

か…。爆撃で、こんもりと茂っていた高地も一本の草も掘り尽くされ、目印となる木すらなかった。

戦死者たちは折り重なって死んでいた。そつとそつと死者たちに、辺りの草をむしり取りおおいかぶせ、せめてもの別れを告げ冥福を捧げた。お腹から赤ちやんが飛び出した若い母の遺体…。

履き物が揃えてあるので上を仰げば、首つりをして死んでいる母と子…。数々の地獄絵図のような光景があった。喉の渇きが激しくなり、死んだ兵士に這い寄り手を合わせて「すまないが、一口の水でもあったら私に頂かせて下さい」と頼み水筒を探したが、死者も水筒など持つてはいなかった。食料も水もない。仕方がないので雑草に着いた夜露を口にあててチュウチュウ吸った。

そして、やっとたどり着いた南部の洞窟（糸数アブチラガマ）で助かる見込みがない負傷兵にな

り、闇の中に置き去りにされた。自決用の青酸カリを渡された。傷口は腐り、うじがわいた。共に寝ていた、隣りの兵士は死に、腐りだす。破傷風に罹り動くことが出来ず、白骨化していくのを傍らで見えていなくてはいけなかった。一五〇名以上の残された負傷兵はガマの闇の中で水を求め、故郷を想い、家族を想い、命つき、誰にも看取られず孤独に死んでいった。ガマで無数の屍とともに三カ月間過ごした。その中で、たった九

名が生還出来た。

（父、日比野勝廣の手記「今なお、屍とともに生きる」夢企画大地刊より）

娘から見た父の戦後

手記から抜粋した記述は戦場体験の一部にすぎず、数々の語り尽くせない過酷な体験を父はした。父は一九四六年（昭和二十一年）生きて、故郷に帰ることが出来た。結婚して四人の娘も授かった。周りから見たら、普通の幸せな生活をおくっているように見えた。だが、八十五年間生きた中でたった三年間の戦場の記憶は生涯、消えることはなかった。

二十歳の父の目が戦場で見た多くの人達の死を記憶し、耳が炸裂する爆音と亡くなっていった人びとの断末魔の声を記憶し、鼻は屍たちの死臭を記憶し、指は敵兵を殺した銃の引き金を記憶する。体に刻み込まれた戦場の記憶は戦後、父の心の奥へ奥へと入り込み、心の傷となり、亡くなる最後まで、心の中でうずいていた。

「戦争は国と国がすること、戦闘は人と人がすること、つまり人と人が殺し合うこと」

「僕たち兵隊は、鉄砲を持って殺し合いをしなければいけないかった」

「もう、人を殺したくないし、人が死んでいくのを見たくない」

「どんな理由にせよ人殺しはだめだ。人殺しは反対だ！」

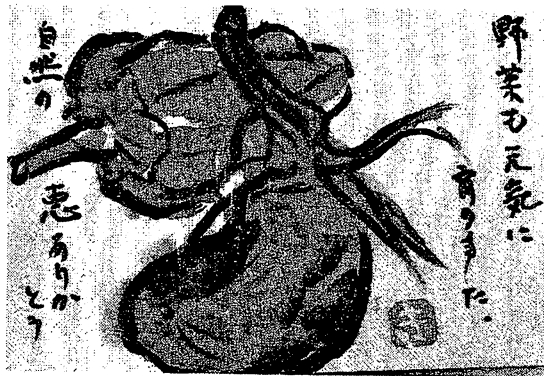
二〇〇九年七月に八十五歳で他界した父の言葉だ。父は簡単に戦争反対とは言わなかった。この言

葉に私は、はっとした。父の心の痛みから出た、叫びに近い願いだ。父の痛みの原点は「人の死」を見てきたことだと思う。

私たちが戦争体験を聞く時、戦争時にそんな惨事が「あった。」と過去形で聞いていることが多い。だが、語っている体験者の中では、まだ過去形ではないと思う。父の中では戦争は終わっていない。戦後ずっと戦場の中をさまよっていた。生涯を終えることで父の長い長い戦争は終わるこ

とが出来た。一度、戦争が起きると、その体験は一人の人間の中でこんなにも長く傷として残り、いつまでも苦しませるものだ。父の生涯を見て思った。そこに「戦争」の恐さを感じる。

私は一九五五年（昭和三十年）生まれで戦争体験はしていない。私は今、身近にいた「元日本兵」の生涯を見て感じた「戦争」の大罪を私の言葉で伝えることが出来たらと思っている。だが沖縄戦での元日本兵の話をする時、加害と被害の部分をどう語ればよいのか模索している。加害性を一方的に責めるのではなく、どうしてそうなったのか？軍国主義のあの時代に「私」が生きていたら、どんな選択が出来たか？問い返してみることが大切だと思う。そして、あの時代にもう一度、戻らないようにするには、どうすればいいのか。あの時代を生きた人達が、今を生きる私たちに残してくれた課題だと思う。



—大澤 清水—

富山空襲の記憶

一九四五年八月二日の未明

大治 朋子

(海老名市在住)

六十年前の八月二日の未明、富山の市内は火に包まれていた。三歳に十日足りない私は、伯父(中学生)に負ぶわれて逃げながら、「どうして幼稚園や学校の先生やお姉さん達が、七輪やかまどの中に入っていくのだろうか?」と思った。母の「かわいげに: (「可哀想」という悲鳴に、お堀の底を見ると、防空頭巾をかぶり手をつないで仰向けに沈んでいる二人の兄妹の姿が目映った。焼夷弾で辺りはとても明るかった。お堀の石垣の

窪みに九ヶ月の妹を置いてオムツを替えていた母。それらの様子ははっきり見えていた。

母は妹を負い、当時の大家さんの母と息子、近所のお婆さんを引き連れて、まずお堀に向かつて逃げた。一時、爆撃が収まって、みんな中心部に戻っていったが、母は外へ外へと逃げた。「朋子は生きとるかな?と見ると、大きく目を見開いて見とったさ」。そのあと中心部に激しい爆撃があり、「せつかく助かった人達も、もう空襲は終つたと戻つて、命を失つたんやさ」と、私は成人してから母から聞いた。この時の富山の空襲では、二七〇〇人から八〇〇人の犠牲者がでたという。「アメリカ兵の顔がはつきり見えた、笑いながら爆弾落としていた、高笑いする声が聞こえたさ。」とも母が言っていたが、笑い声が聞こえるはずもない。爆撃による爆音を、母はそのような気持ちで感じたのだろうと理解した。父の話によ

ると、「空襲の日、富山の連隊では焼夷弾が降りそそぎ、その始末をするのに必死で家族のことを考える暇はなかった」とのことだった。

私の家族は、当時職業軍人だった父の転勤で、故郷の飛騨高山から富山市に転勤していた。私は、昭和十七年双子の姉として生まれた。昭和十九年、更に妹が生まれ、昭和二十年八月の空襲のときは、二歳上の姉（五歳）と双子の妹（二歳）は飛騨の親戚に疎開。私と九ヶ月の妹が富山に残っていた。富山で一軒の借家を上下で借りていた金沢の国鉄員の夫婦が、空襲のあと心配して富山の家を見に行つたところ、家々は跡形もなく焼けており、焼け残ったポンプに『みんな無事、高山へ戻った』という父の字で木札が下げてあるのを見て安心したそうだ。

その国鉄員夫婦が、双子で生まれた妹のほうを自分の子のように世話をしていたので、養女にし

たいと戦後言ってきた。五く六歳の頃。妹は、はつきり「嫌だ」と断り、母が「お前はどうか？」と私に聞く。断ると母が困るのではない

か…と思ひ「うん」と返事。成人してから妹に、何故断つたのか聞くと、「三歳のとき疎開していたが、他人の家でのつらさを感じたからよ！」

私は、昭和二十四年富山の小学校に入学、父から「いま、お父さんは仕事が無いから（職業軍人だった父は公職追放だった）こんなものしかやれんがカンニンしてくれ」と言つて若草色のセルロイドの下敷きと筆箱を入学祝いに貰つた。涙をこらえた私の目に、若草色のセルロイドの下敷きは、春の日にキラキラひかり、とてもまぶしかった。

小学一年生の夏休みに入つてから、私は養女として親元を離れ、金沢で暮らした。金沢に住んでから、私はいつも同じ夢を見るようになった。「みんなが七輪やかまどの中に入つていく夢」、

「お堀の底の兄妹の夢」。しかし、金沢は戦争とは縁遠い街。私の夢の意味を教えてくれる人はいなかった。たまに飛驒に帰っても夢の話をする機会はなかった。「もう戦後ではない」ということが言われ出した頃、私は二十歳になっていた。雑誌「世界」だったか、東京空襲の様子、馬が黒焦げになっていった……という文章を読みハット気付いた。私のいつもの同じ夢は、富山市の空襲の記憶なのだ……と。三才の私には「火の燃え盛るところ七輪、人が多くいるところ学校・幼稚園」という認識だったのだろう。

富山の大家さん母子は（息子は当時二十五歳）飛驒と一緒に来て何年か高山の我が家の離れで暮らしていた。そのおじさんから何十年もたってから聞いた話。『家が燃えて焼け野原のところを札束を持って土地を買いにくるんだよ。こっちはこの世も終わり、と思っているところだから相手

の言うなりで土地を売った。山もないかときく、山も全部売った、考えるゆとりもないときだよ。』と話してくれた。また、私が慕った大家さんのおばあちゃんの神岡鉦山での商家時代の話。『鉦山から朝鮮の男性が逃げてきた。お握りを作って渡したら、手を合わせていったさ。同じ人間やもの、かわいげに……「可哀想」』と私に差別のない平等の精神を教えてくれた。

空襲で命を失うだけでなく、戦争は、それぞれの人生の深い部分にかかわり、人生を変え傷として残り続ける。パキスタン・アフガニスタン・パレスチナ・イエメン・チベットなど紛争地帯の映像と、お堀の底に沈んでいた兄妹の姿と、六十五年後も変化なしが、心痛む。

香月泰男画伯の

シベリア・シリーズを観て

佐藤 寿満子

(片瀬海岸在住)

平成十六年二月二十二日、私は偶々見たNHKの教育テレビの「新日曜美術館」で香月泰男画伯の没後30年「シベリア・シリーズ」展が東京ステーションギャラリーで開催されていることを知った。

彼は昭和十八年に応召で満州に渡ったが、敗戦と同時にシベリアに輸送された。セーヤ及びチエルノゴルスク収容所に抑留されて苛酷な労役に従事するも、何とか堪え抜いて昭和二十二年四月、

復員した。応召から復員までの四年余りの体験を復員後から亡くなる直前（昭和四十九年没）まで五十七点の油彩画に描いた。彼のライフワークでもあったそれらの作品群が「シベリア・シリーズ」と言われている・・・と聞いた。私は、是非とも見たいと思った。

昭和十九年、満州で私は生れた。敗戦後、私の父もシベリアに連れて行かれた。ソ連アムール州テルマ第二二二収容所―父が戦病死した場所である。私には父の記憶が全くない。「シベリア・シリーズ」を見ることで、たとえわずかでも父につながる「何か……」が解るような気がしたので。

一月二十七日（金）、夫と一緒に東京ステーションギャラリーへ。

香月画伯が、「シベリア・シリーズ」として描いた作品のうちの30点と、その他の作品が展示された会場には思いのほか、多くの年配者が訪れて

いた。皆、一作一作を時間をかけてじつくりと見て廻っていた。

「シベリア・シリーズ」の中で特に強く私を捉えたのは「埋葬」「涅槃」と夫々タイトルの付いた二枚であった。作品の多くが黒色を基調としていたが「埋葬」は温かみのある色調で描かれていた。自筆解説分として次のように書かれていた。

『セーヤ収容所では、栄養失調と過労から死者が続出した。収容所の林に小鳥がやって来て、目のような声でないた。その声は「ジフトリヤー」と聞こえた。ジフトリヤーとはロシア語で病人の意味である。この可憐な姿の、死の予言者の歌に合わせるかのように、毎日のように戦友が死んで行った。体の中の栄養も、精も、根も使い果たした者の死は静かだった。

死者は山の斜面に埋葬した。柩かわりの毛布は、墓に入れる時に取り去られ、顔の上にわずかばか

りの白布をのせてやるのが、かえって痛ましく、正視出来なかった。凍った土は硬くて掘りにくく、穴の浅いところは、地表からわずかに掘り下げた程度だった。雪解けには、その何体かが露出した。私は、異郷の冷たい土の下に葬られる戦友を、ことさらあたたかい色で描いた。』

一方、「涅槃」の自筆解説分には

『私は死者が出ると、その顔をスケッチしてやった。あり合わせの紙のきれ端に、鉛筆でかんたんなスケッチをして、水彩をほどこした程度のものである。もし自分が死なずに、無事日本へ帰ることが出来たら、遺族を訪ねて一人一人渡してあげようと思った。しかし、もし私が死んだら、一体だれが私をスケッチしてくれるだろうか、と思ったら暗い気分になった。この記念物も、ソ連兵に見つかって取り上げられ、焼き棄てられてしまった。スケッチはなくなったが、私は死者の顔を

忘れない。どの顔も美しかった。肉が落ち、目がくぼみ、頬骨だけが突き出た死者の顔は、何か中世絵画のキリストのデスマスクを思わせるものがあった。彼等の一人一人は私の心の中に生きていて、私の絵の中によみがえる。』とあった。

遠い遠い記憶だから定かでないが、父の遺骨は幼な子であった私にも持てた程、軽いものだった。中には紙片が一枚入っていただけ。―と後々聞いた気がしている。

画伯と父は収容所こそ違うが、その中にいた人達の待遇はどこも同じだっただろう。きっと私の父も、命果てた時は顔に白布をかけられただけで、冷たい土の中に葬られたのだ。

今年、誕生日（十月二十九日）が来ると、私も還暦と呼ばれる年令になる。父の年令をはるかに越えた今、辛く、苦しかった父達の時代を香月画

伯の作品を通して、わずかにせよ知ることが出来た。これらの作品を残してくれた画伯に心から感謝したい。



―田中 素子―

滿蒙開拓義勇軍に志願し

北滿の地に散った友のこと

市川 セイ

(羽鳥在住)

昭和十五年の師走、兄は、甲府へ入隊しました。その日は、暁から、近所・親戚・村の人々の歡呼の聲に送られ、故郷の駅を出立して行きました。私は、悲しみに遠ざかる列車を泪で見送りしました。入隊後、間もなく兄は北支那に赴くことになり、父は近くに住む叔父と芝浦の港に見送りに行きました。帰った父が、しみじみと「戦地へ行く人を送ること程、悲しいことはない。隣にいた若い奥さんが、ご主人を送りに来て、船が遙か彼方に消えるまで、声を限りにその名を呼んでおら

れ、断腸の思いだった」と話してくれました。我が子を送る父も、また、さぞかし辛かったことだろうと思いました。

出征兵士の家となつて、学童の勤勞奉仕が我が家にも巡回してきました。麦踏み、麦の落ち穂拾い、草取りなど農作業をしました。弟達も一緒に手伝いました。長兄の次に次兄も甲種合格となり、また、大勢の人々に見送られ、東京麻布へ入隊しました。しばらく東京に勤務していましたが、初冬のある日、「今日は外泊許可があり、帰省しました」と次兄が帰ってきました。「今度、宮様付きで南方の島に征きます。もう敵の戦艦で囲まれているので、出航も、日時も秘密の内に征く。衣服も無いので防寒服の代わりに新聞紙を身にまとい、つて行く」と話し、翌朝、一人で旅立つて行きました。

私たちは、欲しがりません勝つまではと頑張

ました。物資は、ますます逼迫し、桑園は、食料増産のため、桑の木を抜き農園にするようにというお達しがあり、家族総出で桑の木を抜き、陸稻、麦、甘藷などを植付けました。養蚕によって生糸を輸出し、外貨をえて軍備をしたのに、今、戦いによって招いた飢渴の苦しみの中で、大事な桑まで抜く始末になるとは、と思つたもののです。

青年学校に通っていた私は、同級生の三四子と二人で、軍国歌謡を唄って遊びました。「麦と兵隊」、「梅と兵隊」、「出征兵士を送る唄」、「太平洋行進曲」、「日の丸行進曲」、「歩兵の唄」、など数多い軍国歌謡、士気高揚の為に作られた歌を、歌集を見て歌いました。

「私ね、あの人と思う人があるのよ。誰でもそうした人があるわね」と三四子は言う。「ね、貴女もあるでしょう。教えて」と。「私にはそういう

人、いないのよ」と言うと、「でも、あの人、素敵だなと思う人あるでしょう。誰なの。」「うん、時々近くの家に来ていた学生服の人、とても恰好良い人だと思つたわ」そんなはかない話をしたりしました。

その後「私ね、兄さんが足に障害があつて、兵隊さんになれないでしょ。それで、私が代わりに満蒙開拓義勇軍に入ることにしたの。こんな非常時でしょう、一人くらいお国のために尽くさなければ申し訳ないと思つてね」と言つて、昭和二十年の春、北満の地へ、一人、潔く旅立つて行きました。

我が家では、一ヶ月に一度くらいの割合で、禅宗のお寺へお参りに行つており、時々、弾除け観音のお札を頂いて居りました。同級生の石塚さんが、「今、外地に出掛けても、沖に出れば、船はすぐに敵に沈められてしまうというのに、三四子

すぐに敵に沈められてしまうというのに、三四子ちゃんは、よく行ったもんだ」と話しました。それでも、三四子ちゃんからは、無事目的地に着いたとの葉書が届きました。三四子ちゃんにも兄と同じ弾丸除けのお札を送ったら、返事がきて「貴女の友情には泣けます。第二次の募集には是非こちらに来て下さい。私は毎日まんじゅ傘をかむって、広野の草取りをしています」という文面でした。父に、渡満のことを話すと、一蹴されてしまいました。

それからも一生懸命増産に励みましたが、空襲は日に日に激しくなり、平塚も焼夷弾でひとたりもなく焼土と化してしまいました。父は、三里の道を、家にあつた古材を荷車に乗せ、叔母の家（バラック）を建てに行きました。

敗戦の日を迎え、外地の兄や三四子のごことが心配でたまりませんでした。翌年五月、我が家では

南方から、支那から元気に生還の兄をむかえる事が出来ました。しかし、三四子はついに帰って来ませんでした。

国敗れ、城敗れて、白虎隊が自決したように、あわくはかない初恋の夢を抱いたまま、純粹無垢な十七才の、まだ花もつぼみのわが友は、遠い北満の地に散ってしまったのです。しかし、身を挺して、平和の礎となつた彼女のことは、何時までも私の心から消えることはありません。



— 鈴木 令子 —

八月十五日に生まれて

上浦 孝彦

(亀井野在住)

私は昭和十八年生まれ。したがって戦中派ではありませんが、もちろん戦争そのものを直接知っていないわけでもありませんし、悲惨な思い出もありません。父は一八九七年の十九世紀生まれ、歳がいき過ぎて兵隊にはとられず、七人兄弟の上二人は女で、その後五人続けて男が生まれるも、長兄が昭和八年生まれで徴兵にはほど遠く、身近かに戦争の直接の犠牲者がいなかったし空襲にもあわなかつた、というのが理由です。男五人の末の双生児の兄として生を受け、私は陸軍、弟は海軍へと

決まっていたような。赤ん坊が兵役に就くのに少なくとも十五年から二十年はかかるように、国はいつまで戦争を続けるつもりでいたのでしょうか。

横浜で生まれ、終戦間際に父の故郷の和歌山の山奥へ家族の大半とともに疎開、毎日サツマイモばかりを食べていて、弟と二人で代わりばんこにお芋のウンチをしていたそうです。不思議なこと、母か姉かが、そうでなくても薄暗い電灯に黒い布を被せていたのを見ていた記憶があるのです。灯火管制？でも、二歳足らずの幼児がそんな光景を覚えているわけありません。何故そんな記憶があるか、いまだにわかりません。

戻ってきた横浜の家から少し行ったところ「浮浪者」と呼ばれていた人たちの住むバラックがありました。今でこそ戦争の悲惨な犠牲者であると理解できるものの、当時はただ避けていたものです。また、「オンリー」とか「パンパン」と

呼ばれた女性もいて、訳もわからずに子供心に蔑んでいたような気がします。戦争は終わっても、深い傷が日本のいたるところに刻まれていたのです。私の誕生日は八月十五日、「平和憲法をこのままの形で後世に、世界に！」と願う気持ちとどこかで繋がっているようにも。なにか因縁じみたものを感じます。微力ではありますが、志は大きく「日本と世界の平和」に向けて、貧者の一灯をかざしていきたい。



— 荒井 勝子 —

わたしの大連 一第二章一

中国帰国者 山川 敬子

(亀井野 在住)

残留婦人の母は、ドラや太鼓に送られ花の馬車でゆらゆらと中国人の嫁になったのではありませぬ。日本人の子供である私を連れて「この子を連れてきました。」と言っていました。そして私には「お父さんと呼ぶのよ。」と。当時十一歳になつていた私は、嫌がつて母の背中に隠れていました。すると「腹いっぱい食べるんだよ。」「学校に行くんだよ。」と流暢な日本語で声を掛けられて、びっくりしました。母と同じ病院の長崎大学医学部卒業のお医者さんでした。私は戦争でなくした

父の面影が薄かったので、中国の養父を「お父さん」と呼ぶようになりました。

戦後の中国では、日本人になるのが辛かったです。それは日本兵が犯した残虐な行為が多数あったからです。中国残留孤児、残留婦人達はあの侵略戦争の歴史を背負つて「痛改前非」（前非を深く悔い改めよ!）という行動をとらなければならなかつたのです。私たちは国境を越え、中国人の痛みを自分の痛みとして苦楽を分かち合い、新中国の建設に少しばかりの貢献を尽くしてきました。さて、あの戦争で残された日本人は「何時ごろから、日本に帰つてこられたの」、「帰つて来て良かったの」と聞かれたことがあります。日本政府は一九八一年、やつと重い腰をあげ、その年の十一月から「中国残留邦人の肉親調査」に着手したのです。日本と中国が国交を回復してから九年後、戦後三十六年も経つてからのことでした。多

多くの日本人が異国他郷での死、その遺体も荒野に放棄されたままなんです。この戦争で私たちには「幼い日の幸せ」「ロマンチックな青春」「中高年の生き甲斐ある生活」「老後のゆとりと楽しさ」など、どれ一つ取っても与えられなかったんです。戦争がなければ今の中国残留邦人問題もなかったと思います。

最後になりますが、私は戦争は反対、もう二度と戦争を起こさないよう、今、出来ることは戦争を知らない世代に戦争の悲惨さを語りついでゆくことです。これが私達に残された使命だと思えます。

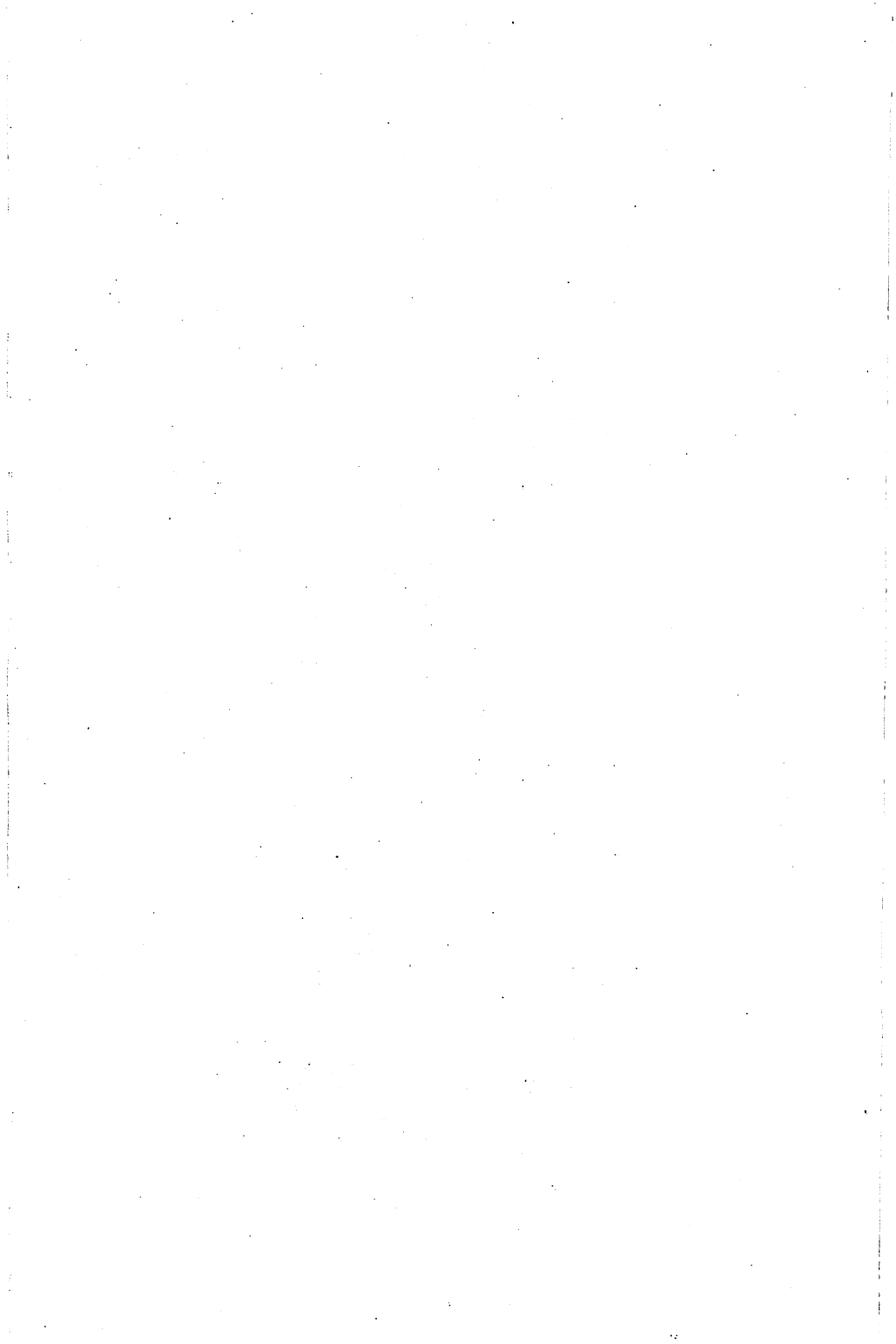
戦争は二度といやです。

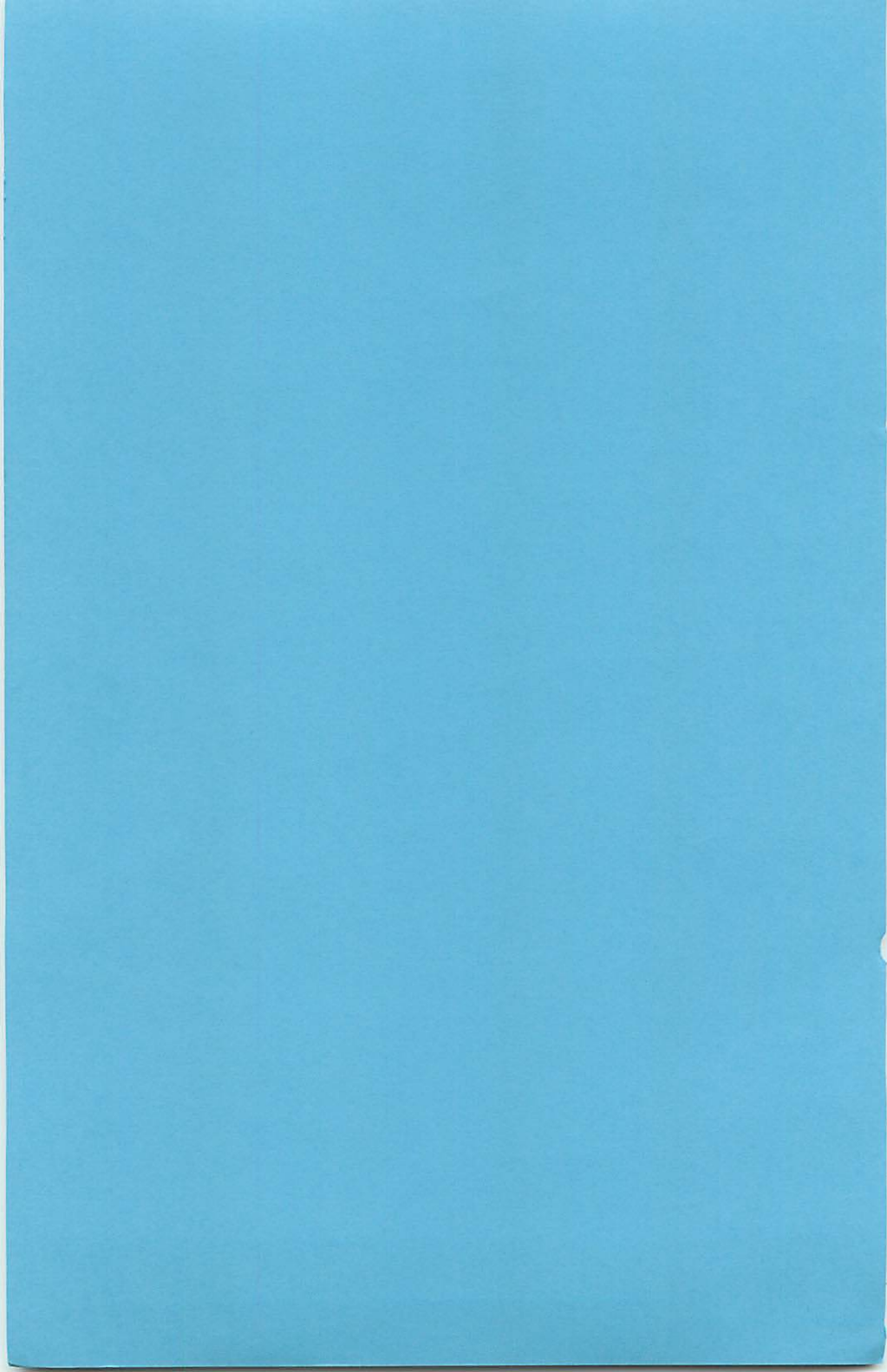
戦争を二度と起こさないようみんなで平和を守りましょう。

(註 山川さんの作品は、第3集の続編です)



― 渡辺 王子 ―





発行 ふじさわ・九条の会

連絡先 藤沢市亀井野 1371-5 小林 0466-44-0375

折原 0466-26-3321 永田 0466-34-1986

河西 0466-25-4951 発行日 2010・04